

## 平成17年度看護業務量調査の分析

### An analysis of nurses workload in this years

業務委員会 ○中村友枝 澤谷ゆき江 根井きぬ子 三井貞代  
吉田美恵子 小幡礼子 両角裕子 松本あつ子

#### 《要旨》

昨年度の業務量調査結果の報告では「診療・治療の介助」における看護者としての役割認識の重要性を提言した。その結果、今年度は「診療・治療の介助」の業務時間の増加を認めた。その他、直接看護の項目が増加している。減少している項目は「事務業務」「物品管理」「電話による連絡」などであった。時間外業務では「記録」に費やす時間が最多であり、記録内容検討の必要性が示唆された。

#### 《キーワード》

業務量調査 診療・治療の介助 記録

#### I. はじめに

業務委員会では平成元年より業務量調査を行い、昨年は「診療・治療の介助」について提案を行った。今年度も看護業務量調査結果から項目別比率の総業務時間年度推移の大きい項目について検討分析したので、その結果を報告する。

#### II. 研究方法

##### 1) 業務量調査結果の分析

分析の対象：平成17年度の業務量調査結果

##### <業務量調査の方法>

- ・平成17年11月7日（月） 第1月曜日に実施
- ・日勤帯開始時間から夜勤帯勤務時間終了まで勤務する全看護師が実施  
（分単位で1時間区切60分ずつ全勤務時間）
- ・看護業務44項目毎にタイムスタディー調査シートに自己記載

##### 2) 倫理的配慮

業務量調査、分析調査とも本研究以外に結果を使用しないこと、また、個人が特定できないように配慮した。

### III. 研究結果

平成13年から平成17年までの5年間の看護業務項目別比率の年度推移（図1）から読み取れることは、「診療・治療の介助」「食事の世話」「排泄の世話」「自立の援助」などの直接看護の項目が増加し、「事務業務」「物品管理」「電話による連絡」などの項目が減少している（図2・3・4・5・6・7）。時間外業務時間は殆ど変わらず、内訳は「記録」に費やしている時間が最多であり年々増加している（図8・9）。各病棟の記録時間帯（図10）を見ると、記録時間が1000分以下の病棟では、勤務時間内に分散して記録をしており時間外記録の時間は150分以下であった。それに対して1000分以上の病棟では、時間外の記録時間が200～300分で17時以降に集中していた。

図1 平成17年度看護業務量項目別業務比率

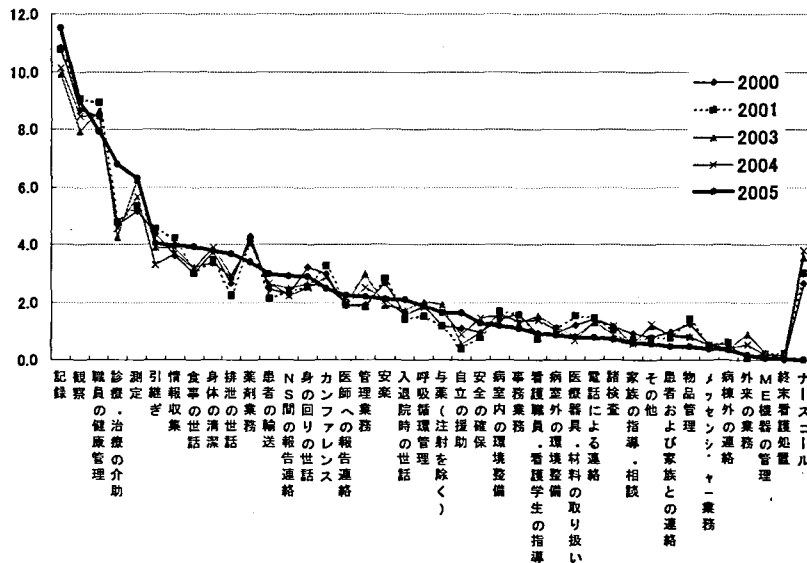


図2 病棟別 食事の世話

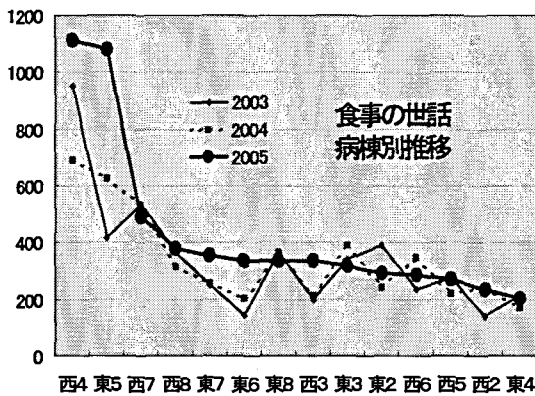


図3 病棟別 排泄の世話

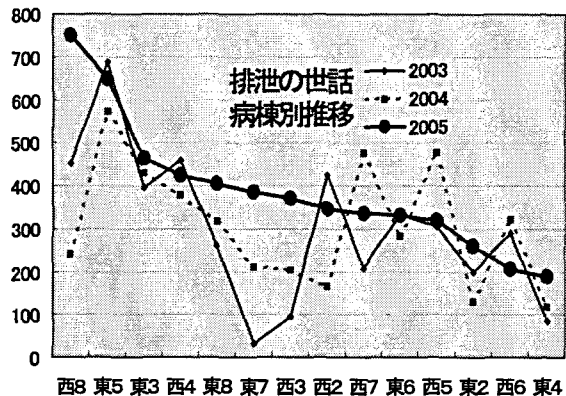


図4 病棟別 食事の世話

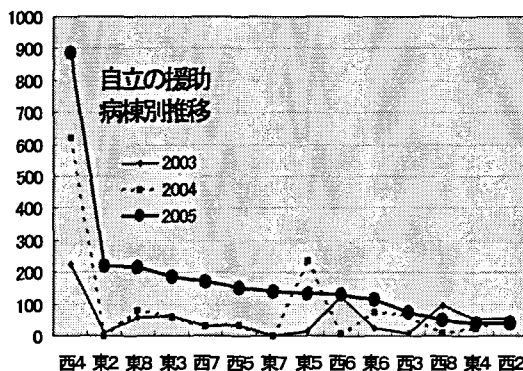


図5 病棟別 事務業務

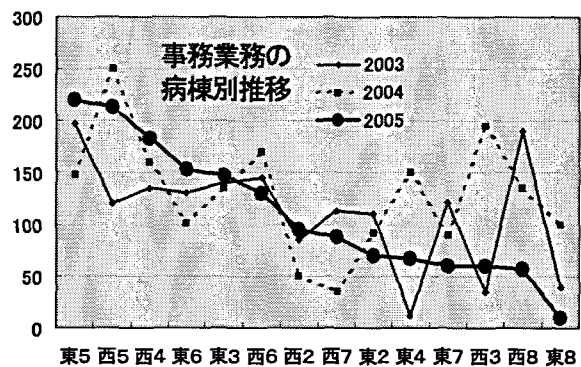


図6 病棟別 電話による連絡

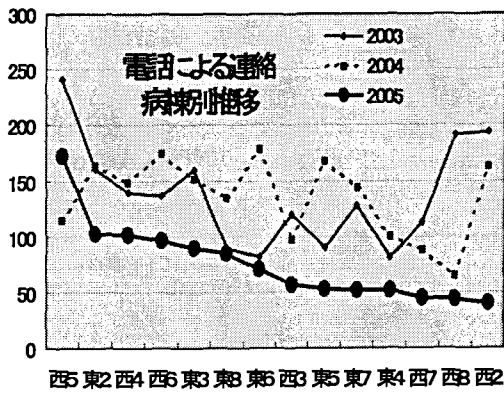


図7 病棟別 物品管理

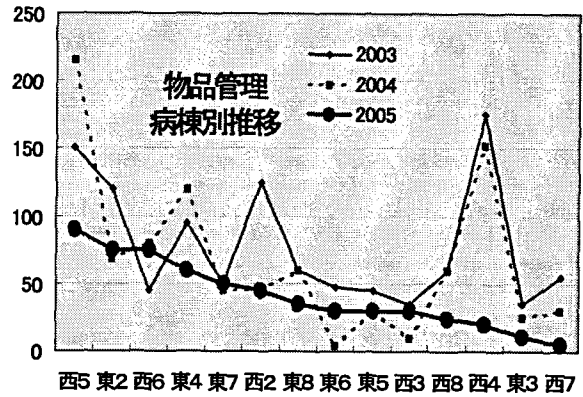


図8 勤務時間後の勤務内容

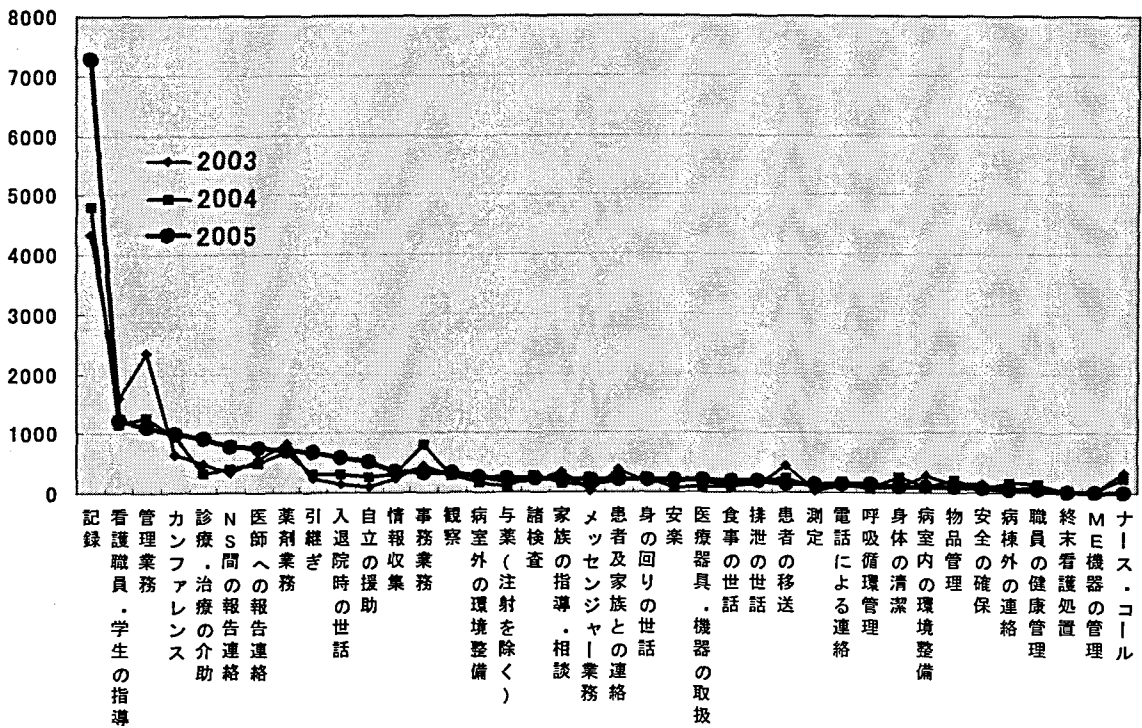


図9 病棟別記録時間

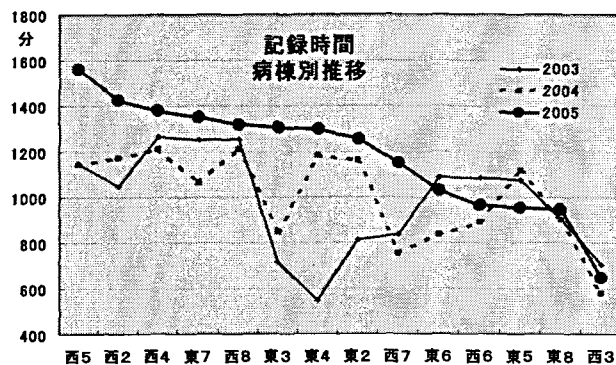
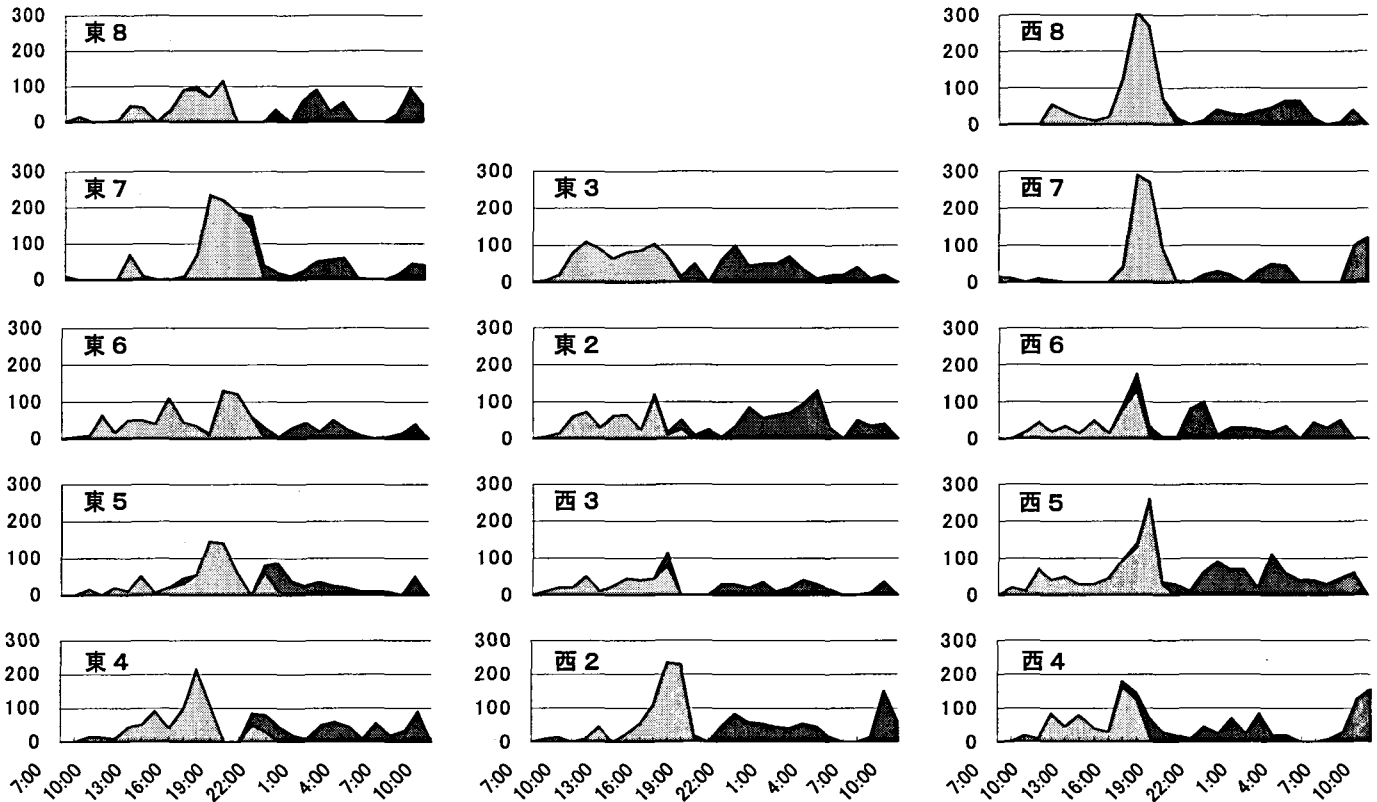


図10 記録時間の病棟別時間帯

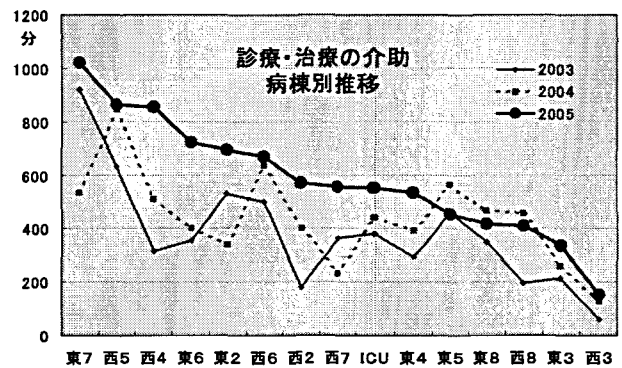


IV. 考察

今年度、最も増加した項目は「診療・治療の介助」であり、昨年度の調査結果で過去15年間に最も減少したと報告した項目であった。「診療・治療の介助」の時間が大幅な増加をみた病棟は、今年度の病棟目標に「医師の行う処置に立ち会う」ことを挙げていた。他病棟でも全体的に増加傾向に

あった(図11)。これは昨年度の業務量調査の結果報告にて「診療・治療の介助」は「患者の状態把握や情報交換の場であると共に、患者を守る立場で看護師が立ち会う必要のある倫理的行為である」と提言した結果が反映されたのではないかと考える。「食事の世話」「排泄の世話」「自立の援助」などの直接看護が増加した要因は、入院患者の高齢化や重症化、在院日数の短縮により個々の患者へかける時間が増加したためと思われる。減少している項目は「事務業務」「物品管理」「電話による連絡」などで、これはクラークの導入・看護助手(ヘルパーの方がよいですか)の増員による効果と判断する。時間外業務時間は殆ど変わらず、内訳は「記録」に費やしている時間が最多であった。「記録」の分散状況を見ると、病棟目標にベッドサイド記録を挙げ、記録超過勤務の削減に意図

図11 診療・治療の介助病棟別推移



的に関わった病棟では、勤務時間内に記録時間が分散している。一方、病棟目標に記録内容の充実を挙げた病棟では、記録時間が延長しているという状況であった。今後、ベッドサイド記録を積極的に取り入れて記録時間の減少を図ると共に、記録内容がおろそかにならないよう、内容の充実を図っていくことが重要と考えた。

## V. 結論

- ・ 業務量調査の分析結果は、各病棟で活かされている。
- ・ 業務量調査の分析結果より「看護の質」や「看護師の健康管理」に影響を与える内容について提言していくことは意義がある。

## VI. 参考文献

1. 日本看護協会看護婦職能委員会編：看護業務指針，P11～15，日本看護協会出版会，1995